

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 瓜生 吉則

本論文は、近現代日本における少年雑誌の歴史を、主にその作り手となった人々の側から丹念に跡づけつつ、「少年」という主体が、近現代日本のメディア文化のなかで言説戦略上の対象／読者としていかに位置づけられ、「雑誌」という媒体と結びついて機能してきたのかを明らかにした労作である。瓜生氏は、これまで児童文学研究などでの少年雑誌の分析が、しばしば読物や記事の内容の分析に終始してきたことを批判し、むしろ「少年」と「雑誌」の関係自体の歴史的・社会的探究を目指す。雑誌の作り手が読者としての「少年」をどう概念化していたのかに注目し、「雑誌」というコミュニケーション形式を同時代的／歴史的に比較する中からメディアとしての少年雑誌の変容過程を明らかにしようと試みている。

論文は、序において概念設定と方法論を提示した後、第一章で、文学や教育の言説における「児童」や「少年」の扱われ方に焦点を当て、それらが「保護」ないしは自発的な「成長」を促される対象とされ、また読物のメッセージを「白紙」の状態を受け取る「児童／少年」という観点から、「読物による教育」の重視されるようになっていった過程が示される。

第二章では、明治中期から昭和初期までを扱い、少年雑誌の教育的機能への信憑が多層化していく展開が記述されている。公教育の補助媒体から娯楽媒体へと多様化していく少年雑誌は、大正半ば、少年読者の自主努力で成長することを鼓舞する「大衆的児童文学」と、綴方や童謡という形式で「無垢なる」児童を保護する「芸術的児童文学」の流れへ分岐する。しかし両者には、雑誌の強力な教育機能と読者の「透明」な身体への信憑が共有されていた。

第三章では、昭和初期のプロレタリア児童文学運動を論じた後、1930年代に醸成された反商業主義的な歴史観・雑誌観が、やがて官民一体となった「悪書」追放の運動へと結実していく様相を展望し、この時代の少年雑誌が共有していた「少年」読者観を総括している。

第四章では、戦後、「少年」と「雑誌」の結合が溶解していく様相が示される。読者のマンガ投稿が誌面の重要な構成要素となった『漫画少年』は、作り手に読者を一方的に措定することを断念させ、『少年マガジン』は、劇画の積極的な導入によって読者と共に雑誌が成長する関係を組織する。さらに第五章では、徹底した読者アンケートに基づいた誌面構成を行う70年代以降の『少年ジャンプ』が、編集者機能を透明化させる過程として論じられる。

以上のように、本論文は、戦前の児童・少年文学から戦後の少年マンガまでを通底する視座に収め、一貫した実証的論証を展開している。雑誌の雑種性や市場の力についての分析などについての検討がまだなお発展可能性を残しており、現代を扱った第五章の論述がやや平板になってしまった点、一部に定義がやや曖昧なまま用いられている概念があることなど、若干の難点は指摘されたが、単なる内容分析でも読者論でもなく、言説が存立する認識論的な地平における少年雑誌の連続性と非連続性を綿密に検証している点は高く評価でき、新しい研究領域を開拓するものと認められる。よって本審査委員会は、本論文の学術的意義を高く評価し、全員一致で博士（社会情報学）の学位を授与するに値するものと認定した。